

国山大学 正員 佐宮宏和
 ○京都大学 学生員 井上幸一

1. まえがき。本論文は、動的サブストラクチャ法により多スパン高橋脚橋の橋脚直角水平方向を対象とした地震応答解析を行ったものである。同構造物の動的解析には、通常の有限要素法が直接適用できるが、コンピュータの容量、演算時間により、分割要素数がある程度制限される。そのため解の精度をそれ以上上げたものとなる。そこで解析対象構造物を部分構造系に分け、それぞれモード解析して全体系の運動方程式を立てて。これにより、比較的多くの分割要素を採ることが可能となる。

2. 運動方程式。運動方程式を書き表わせば、橋脚部に関して、橋脚と橋脚の接合部における絶対変位を $\{\bar{x}_i\}_q$ 、それ以外の内部座標での絶対変位を $\{x_i\}_q$ として

$$[M_{ij}] [M_{qj}] \{\bar{x}_i\}_q + [C_{ij}] [C_{qj}] \{\bar{x}_i\}_q + [K_{ij}] [K_{qj}] \{\bar{x}_i\}_q = \{F_j\} \quad (1)$$

ここに $\{F_j\}_q$ は接合部における断面力である。なお、上記では質量、減衰、剛性マトリックスと上記の変位に応じるようにサブマトリックスに分割している。いま、変位 $\{x_i\}_q$ を橋脚に外力が作用せず接合部の変位によらず、完全すき変位 $\{\bar{x}_i\}_q$ 、および接合部の変位が固定拘束されていない場合の外力によらず、完全すき変位 $\{x_i\}_q$ に分離する。

$$\{x_i\}_q = [\beta]_q \{x_i\}_q \quad \text{ただし } [\beta]_q = [K_{qj}]^{-1} [K_{ij}]$$

この変換を式(1)に対して行うと、 $\{x_i\}_q = \{\bar{x}_i\}_q + \{x_i^*\}_q$ 、 $\{x_i^*\}_q = \{\bar{x}_i\}_q + \{x_i^*\}_q$ とおくと

$$\begin{aligned} & [M_{ij}] [\beta]_q [M_{qj}] + [M_{ij}] [B]_q [B]^T [M_{qj}] + [B]^T [M_{ij}] [B]_q [M_{qj}] + [B]^T [M_{ij}] [B]_q [M_{qj}] \{\bar{x}_i\}_q + \{0\}_q \{\bar{x}_i\}_q + [K_{ij}] [K_{qj}] [\beta]_q \{0\}_q \{\bar{x}_i\}_q \\ & = \{F_j\}_q - \left\{ \begin{array}{l} \left([M_{ij}] [\beta]_q [M_{qj}] + [M_{ij}] [B]_q [B]^T [M_{qj}] [\beta]_q \{\bar{x}_i\}_q + ([M_{ij}] [\beta]_q [M_{qj}] [\beta]_q \{\bar{x}_i\}_q) \right) \quad \text{(は相対変位)} \\ \left([M_{ij}] [\beta]_q [M_{qj}] [\beta]_q \{\bar{x}_i\}_q + [M_{ij}] [\beta]_q \{\bar{x}_i\}_q \right) \quad \text{(は地動を表わす)} \end{array} \right\} \quad (3) \end{aligned}$$

となる。次に、橋脚の总数を m とす。各橋脚につけて表わした運動方程式をすべての橋脚につけて書き下し、これを 1 つのマトリックス方程式で表わせば、次のようになる。(一 および 2 は上と同様)

$$\begin{bmatrix} [M]_{p_1} & 0 & \{\bar{x}\}_{p_1} \\ [M]_{p_2} & 0 & \{\bar{x}\}_{p_2} \\ \vdots & \vdots & \vdots \\ 0 & [M]_{p_m} & \{\bar{x}\}_{p_m} \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} [C]_{p_1} & 0 & \{\bar{x}\}_{p_1} \\ [C]_{p_2} & 0 & \{\bar{x}\}_{p_2} \\ \vdots & \vdots & \vdots \\ 0 & [C]_{p_m} & \{\bar{x}\}_{p_m} \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} [K]_{p_1} & 0 & \{\bar{x}\}_{p_1} \\ [K]_{p_2} & 0 & \{\bar{x}\}_{p_2} \\ \vdots & \vdots & \vdots \\ 0 & [K]_{p_m} & \{\bar{x}\}_{p_m} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \{F\}_{p_1} \\ \{F\}_{p_2} \\ \vdots \\ \{F\}_{p_m} \end{bmatrix} - \begin{bmatrix} [M]_{p_1} & 0 & \{\bar{x}\}_{p_1} \\ [M]_{p_2} & 0 & \{\bar{x}\}_{p_2} \\ \vdots & \vdots & \vdots \\ 0 & [M]_{p_m} & \{\bar{x}\}_{p_m} \end{bmatrix} \quad (4)$$

ここで $\{\bar{x}\}_{p_i}$ は橋脚との接合点における変位 $\{\bar{x}_i\}_{p_i}$ とその他の点における変位 $\{\bar{x}_i\}_{p_i}$ に分け、また、 $\{F\}_{p_i}$ も同じように分けられること、それが次のようになる。

$$\{\bar{x}\}_{p_i} = \begin{cases} \{\bar{x}_i\} \\ \{\bar{x}_i\}_{p_i} \end{cases}, \quad \{F\}_{p_i} = \begin{cases} \{F_i\} \\ \{0\}_{p_i} \end{cases} \quad (5)$$

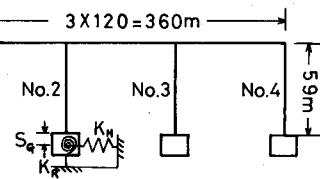
したがって、 $\{\bar{x}\}_{p_i} = [\bar{x}]_{p_i} \{\bar{x}\}_{p_i}$ とモード座標に変換し、 $[\bar{x}]_{p_i}$ を式(5)の $\{\bar{x}\}_{p_i}$ に元して分割する。すなはち、

$$\begin{cases} \{\bar{x}_i\} \\ \{\bar{x}_i\}_{p_i} \end{cases} = \begin{bmatrix} [\bar{x}]_{p_i} \\ [\bar{x}]_{p_i} \end{bmatrix} \{\bar{x}\}_{p_i} \quad (6)$$

$[\bar{x}]_{p_i}$ が正规化されており、減衰マトリックスオーバーにより対角化されさせると仮定すると運動方程式は

$$[I]\{\ddot{x}\}_p + [2h\omega]_p \{\dot{x}\}_p + [W^2]_p \{x\}_p = [\bar{x}]_p \{F\}_p - [\bar{x}]_p [M]_p \{\bar{x}\}_p \quad (7)$$

の形に書ける。ただし、 h は減衰定数、 W は固有振動数であり、各マトリックスオーバーベクトルは全橋脚につい



GIRDER & PIER		
$E(t/m^2)$	$I(m^4)$	$W(t/m)$
GIRDER	2.1×10^7	76.9 66
PIER 1	2.69×10^6	4720 117
PIER 2	2.69×10^6	1826 257
PIER 3	2.69×10^6	4720 117
PIER 4	2.69×10^6	4720 117

FOUNDATION	
$M(t \cdot s^2/m)$	1.378×10^3
$J(t \cdot m \cdot s^2)$	1.498×10^5
$K_H(t/m)$	1.395×10^6
$K_R(t \cdot m)$	6.078×10^7
$S_G(m)$	2.5

(表 1)

て表わしたものである。ここで、橋脚の運動方程式(3)において、変位 $\{\bar{x}_i\}_q$ について、これは $\{\bar{x}_i\}_q = [\bar{x}_i]\{\bar{g}_i\}_q$ とモード座標に変換し、 $\{\bar{x}_i\}_q$ に関する式は、接合部における適合条件により橋脚のモード座標によく、 $\{\bar{x}_i\}_q = [\bar{x}_i]\{\bar{g}_i\}_q$ と表される。したがって、運動方程式は次のようになる。

$$\begin{aligned} & \left[\bar{x}_i \right]^T \left[[M_{ij}]^T [B]^T [M_{ij}]_q [B]_q [B]^T [M_{ij}]_q [B]_q \right] \bar{x}_i + \left[\bar{x}_i \right]^T \left[[M_{ij}]^T [B]_q^T [M_{ij}]_q \right] \bar{x}_i = \left[\{g_i\}_p \right]^T \left[[0] \right] \left[\{g_i\}_p \right] \\ & \quad \left[\bar{x}_i \right]^T \left[[M_{ij}]^T [M_{ij}]_q [B]_q \right] \bar{x}_i = \left[\{g_i\}_p \right]^T \left[[I] \right] \left[\{g_i\}_p \right] \\ & \left[\bar{x}_i \right]^T \left[[K_{ij}]^T [K_{ij}]_q [B]_q \right] \bar{x}_i + \left[\{g_i\}_p \right]^T \left[[0] \right] \left[\{g_i\}_p \right] = \left[\{g_i\}_p \right]^T \left[[B]_q^T [M_{ij}]_q [B]_q [B]^T [M_{ij}]_q [B] \right] \bar{x}_i + \left[\bar{x}_i \right]^T \left[[M_{ij}]^T [B]_q^T [M_{ij}]_q \right] \bar{x}_i \end{aligned} \quad (8)$$

式(1), (8)から断面力を消去して全体系の運動方程式は次のようになる。

$$\begin{aligned} & \left[I \right] + \left[\bar{x}_i \right]^T \left[[M_{ij}]^T [B]_q^T [M_{ij}]_q [B]_q [B]^T [M_{ij}]_q [B] \right] \bar{x}_i + \left[\bar{x}_i \right]^T \left[[M_{ij}]^T [B]_q^T [M_{ij}]_q \right] \bar{x}_i = \left[\{g_i\}_p \right]^T \left[[B]_q^T [0] \right] \left[\{g_i\}_p \right] \\ & \quad \left[\bar{x}_i \right]^T \left[[M_{ij}]^T [M_{ij}]_q [B]_q \right] \bar{x}_i = \left[\{g_i\}_p \right]^T \left[[I] \right] \left[\{g_i\}_p \right] \\ & \left[w \right]^T \left[\bar{x}_i \right]^T \left[[K_{ij}]^T [K_{ij}]_q [B]_q \right] \bar{x}_i + \left[\{g_i\}_p \right]^T \left[[0] \right] \left[\{g_i\}_p \right] = - \left[\bar{x}_i \right]^T \left[[M] \right] \left[\bar{x}_i \right] + \left[\bar{x}_i \right]^T \left[[B]_q^T [M_{ij}]_q [B]_q [B]^T [M_{ij}]_q [B] \right] \bar{x}_i + \left[\bar{x}_i \right]^T \left[[M_{ij}]^T [B]_q^T [M_{ij}]_q \right] \bar{x}_i \end{aligned} \quad (9)$$

3. 解析例。図1に示す3スパン高橋脚橋モデルに対し、固有値解析および地震応答解析を行った。橋脚下端の支持条件としては、固定およびフーチングー地盤バネ系の2種類設けた。このモデルの諸元を表1に示す。なお減衰定数は各次モード5%とした。固有値解析の結果得られた固有振動数およびそれに対応したモードを図2に示す。フーチングー地盤バネ系を橋脚下端に接続することで、固定の場合と比較して固有振動数が大きく低下し、モードも鮮明に1次で著しく変化していることが認められる。また、伊豆沼地震のスペクトルを用いて算出したRMS値およびEl Centro地震を入力した場合の最大応答変位を図3に示す。なお、いずれの地震についても最大加速度は200 galにしてある。この図からも橋脚の支持条件によって、橋脚の変形挙動が異なることが認められる。以上のような相違点はフーチングの回転によるものと考えられる。

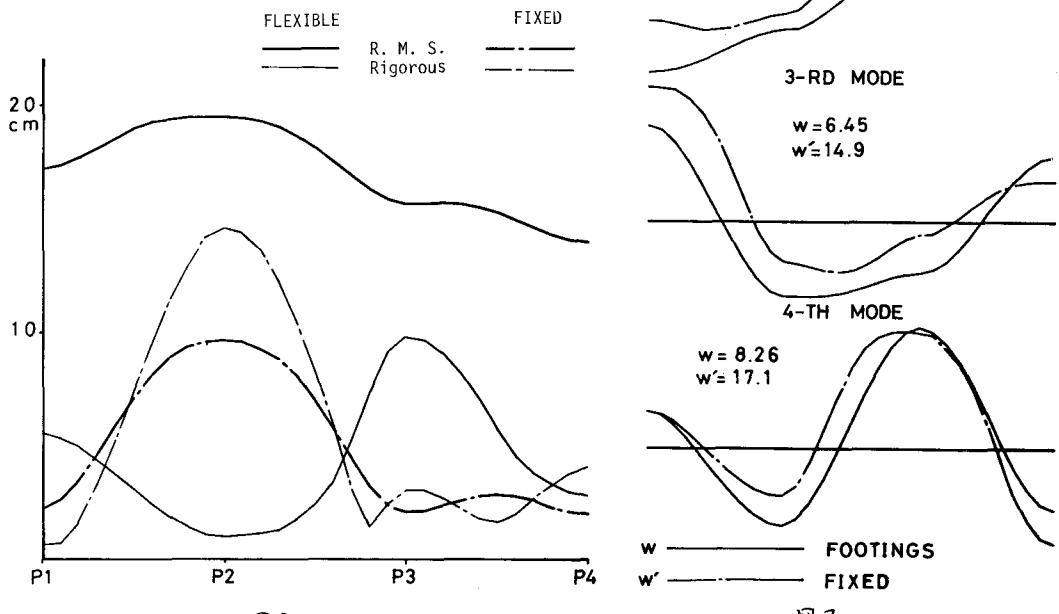


図3

図2

参考文献; Fukreti & Feng: Dynamic Substructuring For Alternating Subsystem, J. Eng. Mech. Div., ASCE Oct., 1978